



今年の日本人会ブースでは、毎年大人気の本場大阪のタコ焼き、風味の良い焼き鳥、餡たっぷりアンパン、綿菓子を提供しました。

フェスティバルの前夜、総勢12名のボランティアでたこ焼きの下準備を行いました。約24キロのタコ、8キロの紅ショウガ、240束のねぎをひたすら切って切って切りまくり、ジャパンフェスティバルへ向けて意気が揚がります。

当日、タコ焼きは、ずらりと並んだ10台のタコ焼き器で、イケメンの男性・女性陣が一生懸命本場のタコ焼きを焼く姿を眼前に、長い列ができました。作っても作ってもその列は短くならず、初日は材料がなくなり終了。翌日は材料を増やしてフェスティバル終了時間まで焼けるだけ焼きました。小麦粉と卵やだしから作る生地は最適な調合が必要ですが、担当の皆さんは直ぐに習得。タコ、ネギ、天かす、鰹節などのトッピング補充、販売促進、集金までチームワークで対応。ジャパンフェスティバルならではの、出来立て熱々のタコ焼きを踊るかつお節とともに食す本場の味を、ヒューストンの現地の皆さんにお楽しみいただけました。

焼き鳥は他の出店が驚くほどの良い味。鉄板プレートの温度調整、湿度維持、プレートの掃除をチームワークで手際良くこなしてタレをつけて販売。両日とも早目に完売してしまいました。

アンパンは、大きい看板がなかったにも拘らず、両日とも1番早く完売。



高校生のボランティアによる購買意欲をそそる展示・販売のおかげです。お値段の割に餡の量が非常に多くて美味しいと好評で、一度食べて再度買いにこられた方も続出でした。

綿菓子は機械が故障するという不運に遭いましたが、直ぐに新しい機械を調達して対応。中学生、高校生のボランティアが手際よく作る大きめの綿菓子のボリュームに、来場者の子供さん達は大満足でした。

忙しくも、楽しく充実した今年の日本人会ブースは、お子様からご年配の方まで準備や運営にかかわったボランティアの皆さんにとっても心に残るイベントになったことと思います。ボランティアの皆さんは、先を読んで自発的に動かれるので非常に効率が高く、レストランが欲しがれる人材がたくさん居られました。暑さにも負けず頑張ってくださったボランティアの方々に感謝、感謝です。

今回は、初めてジャパンフェスティバル会場に来られた方も、初めてボランティアとして参加してくださった方もたくさんいました。これを機に、日本人会としての一体感を強め、来年につなげてまいります。尚、今回の収益は今後のイベント(懇親会、コンサート、落語、新年会等)を通じてヒューストンの日本人コミュニティの皆様へ還元する予定です。日本人会のイベントへのご参加をお待ちしています。(佐藤麻子)



リレー式 ヒューストン日記 第239回 松井 由佳さん

海外生活で不安な事の一つに医療の問題があると思います。ヒューストンに来て2年が経ちましたが、なんとこの2年間で子供が3回入院しました。まさかこんな時に、というタイミングで体調を崩すのが我が家の子供達です。我が家の体験がどなたかの参考になればという思いを込めて、これまでのことを振り返ってみたいと思います。

1回目の入院は、私たちがヒューストンに来て1カ月後の出来事でした。我が家の3人の子供は当時、長男7歳、次男3歳、長女生後9か月、私は小学校に通い始めた長男のサポート、次男のスクール探し、荷物の整理等で毎日パタパタと過ごしていました。そんな中、突然長女が発熱し片耳の後ろが腫れてきました。かかりつけ医の先生に見て頂き、抗生剤を試しましたが効果はなく、近くのTexas Children's HospitalのERを受診することになりました。ERでは11時間の待ち時間を経て入院が決定。しかし投薬では改善が見られず最終的には耳の後ろを切開する手術をすることになりました。まだ0歳の娘に全身麻酔をして手術をすることには不安も大きかったですが、幸い術後の経過もよく入院期間は3泊4日でした。

2回目の入院は、昨年の夏休みに私と子供達だけで一時帰国をした時の事でした。再び長女の高热が続く呼吸も苦しそうだったので検査をしたところ、肺炎に陥っていることがわかりました。上2人の子供たちを実家の両親に預け、私は娘に付き添い6泊7日入院しました。

3回目の入院は、昨年のサンクスギビングでした。地中海クルーズ旅行を計画していた我が家。過去に2回の入院を経験している娘の体調管理に躍起になっていたところ、次男が出発の前日に発熱しました。しまった！そっちゃん！次男は盲点でした。出発当日も次男の発熱は続き、海の上で缶詰状態になってしまうクルーズ旅行はリスクが高すぎるということで、泣く泣く全旅程をキャンセルしました。最終的には川崎病の症状だと

気づき、再びTexas Children's HospitalのERに駆け込みました。入院してすぐに治療を開始することができ、3泊4日の治療期間を経て退院となりました。

この短期間で日米両方での入院を経験した我が家ですが、様々な点で気づきがありました。

まずは、何とんでもアメリカの病室は快適でした。バスルーム、ソファベッド、デスクもあり、付き添いの大人にとっても非常に過ごしやすい環境でした。日本では病室も狭く、夜には娘が眠る子供用ベッドで添い寝していたことは大違いでした。二つ目は、Texas Children's Hospitalではビデオ電話を介した無料通訳サービスを利用できた事です。医師と会話する時はいつでもこのサービスを利用し、非常に助かりました。

医療費については、アメリカの医療費は高いと予め心の準備をしていますが、あまりにも高額な請求を見て気絶しそうになりました。それに比べて日本の医療費は非常に低額で日本は恵まれた国だと改めて感じました。

入院期間はアメリカでは非常に短く不安でしたが、医療費の請求書を見て早々に退院させてくれてありがとう！と心の中で叫んだ事は内緒です。

これらの経験を通して、まずはUrgent CareやERの場所、電話番号などの情報を事前に収集しておくことが大切だと感じました。行先を整理しておく緊急時すぐに判断ができるので安心です。また、母子手帳やお薬手帳にこれまでの日米での記録を集約しておくこともお勧めです。特にお薬手帳へは日本で処方されたお薬の成分名を英語で記入しておく、過去に使用したことがある解熱剤を病院でスムーズに伝えることができ便利でした。またERへ駆け込む際は長い待ち時間を見越して家事や子供の事など出来る範囲で済ませてから病院に向かうのがベストです。そしてERは冷房で極寒ですですので是非とも上着を持っていくのを忘れなく。

もしもの時に備えてこの日記が少しでも皆様の参考になれば幸いです。

